不思議兎企画

明治百四十五年之

遠野物語

兎

明治百四十五年一月

はデジタルライブラリー（http://kindai.ndl.go.jp/）でされているのの『』（３５０の５２）をとし、ねのなをみつつ、やではしくなったにはをり、またところどころにもし、らくむだけならばさほどなどかずともむ、それでいて原書のも忠実に再現するを試みました。のをえるに、の現代のもまたしてければいです。

なお、なるべく原書のいる漢字やの表現を忠実に再現したつもりではありますが、コードやフォントの、のなるや、現代日本語の漢字できえたもあります。もし、加筆された現代仮名の振りや側注に誤り、改善案などお気づきの点があれば改訂を検討致しますので本書作者までご連絡下さい。（tohonomonogatari@wonderrabbitproject.net）

側注はが原書から、は本書による加筆です。がいたりらどうぞ。また、のりは原書そのまま、の振り仮名は本書著者による加筆です。

本書のライセンスはクリエイティブ・コモンズの---ライセンス（<http://creativecommons.org/licenses/by-nc-sa/2.1/jp/>）にてします。、は（http://wonderrabbitproject.net/）です。原書部分はパブリックドメインであり、本書としての著作権の主張は付随する仮名や追加の側注に限ります。

の為にしますと、えばはじめのにいて本書をのいは配布とするなどにいてにでいません。

柳田國男氏、氏、また今なおをすのにしましす。

をにるにす

日本人ではない外国人に向けてという意味ではなく、外国に心馳せる明治４３年頃の日本人の読者を主としたのかもしれない。この年は日露戦争から５年後、日韓併合もあった年。当時の日本は大日本帝國の時代であり、日本列島の外にも国土を持っていた。日本人の多くはきっと当時も東京なり横浜なり、西欧の都市部に伝え聞く近代文明的な世界に少なからず心が旅していたのではなかろうか。そう考えると、この言葉、現代人もまたここでいう外國に在る人々の様な気もする。日本の原風景の重み付けを担う伝承の数々に興味を抱き、知り、そして伝える発端となれば幸いである。

はすべてのよりきたりのよりめてねりをせられしをせしなり。もをもせずをたり。ににはの物語数百件あるならん。はよりをことをす。のにしてよりにきにはののあるべし、わくはをてをせしめよ。のきはのみ。

のはにびたり。よりのにはあり。はきとなり。のなることのよりもだし。はなるがにのりけるなきか。のはちのなり。をのにりてりのをりたり。はきをてりたるを。きなり。のはえてよくけたり。にのことを。よりすればにしはんにてはくちてに。のはによりてなり。つつつのをけてののじきはにするにしてのきなるべし。よりさらにさきのはにざればをらず。きのにはにゆるなりのへゆればのはくみのはのののにたり。はすることくにし。きのをけばをらぬありてをれてぎりたり。のはにきまじりたり。は小さきかとひしが、のにれてざればちなることをり。のにはありてあり。にのみはくたちきかひらめきてのにじたり。とはのなり。のをけたるをりをきてとになり。のくはくしてにあれどもきし。はきてきてぶのもしくははれどもをともするざりき。にしきあるはのをくげてをくあり。のにいてをするにあり。ののをらんとするとかりそめにたるとかのたるとをはにてししたり。郷にはのあり。をてりしなり。のくのに見えのこえたり。道ちがへのの中にはのあり。もくたびれたる人の如くしてありたり。はが遠野郷にてたるなり。

佐々木鏡石氏は遠野出身にして当時新進の小説家。

「來」→「来」

遠野郷は現在の岩手県遠野市とほぼ相違無いが、明治４３年当時は多くの町村に分かれた一帯だった。

「傳説」→「伝説」

「戰慄」→「戦慄」

平地人は一般的な人里に暮らす比較的文化的な生活を送る人々の事。

陳勝呉廣は古代中国（秦）で起きた農民による伝説的な初めての反乱の事。目論見としては成功した事になっている。

花巻も現在の岩手県花巻市は…。明治４３年は稗貫郡花巻町（稗貫郡花巻川口町は明治２２年に同時に成立した異なる町）であった。

「餘」→「余」

町場は宿や輸送の拠点たる場所。

煙花は中国語で花火の事らしいが、ここでは植物の猫柳の事ではなかろうか？

「獨り」→「独り」

「黔い」≈「黒い」

「爲」→「為」

「厚總」→「厚総」、馬具の組み合わせの事。「甲冑古式馬具工房あべ」（<http://www.yabusame-1.com/glossary-harness/index.html>）など参考に。

「高處」→「高所」

「續けて」→「続けて」

「名處」→「名所」。原書も仮名あり。

「區域」→「区域」

「賣買」→「売買」

「證文」→「証文」

附馬牛は現在の遠野市にも行政区画として残る地名。

「早地峯」は現在一般には「早池峰」と記される山。

菅笠は江戸の頃合いの時代劇で旅人が道中でよく被っているあの笠。

「片假名」

→「片仮名」

「綠」→「緑」

「劍」→「剣」

「聲」→「声」

「兒」→「児」。

盂蘭盆は夏の頃合いに残るいわゆるお盆の風習、仏教行事。

新しき佛はその年に亡くなった家族。

「指點」→「指点」。指さし数えたのであろう。

「數」→「数」

「靈」→「霊」

黄昏は夕暮れにして逢魔時、大禍時。

「盡す」→「尽くす」

報賽は神仏へのお参りの事。

燈火は松明なり提灯なり、篝火もあったかもしれない。

雨風祭の藁人形は現在も風習が残されており容易に見る事ができる。

狭隘はとても狭いの意。

ふにのはとものにず。にがなればとてこんなをしのなるを以てにんとするはのなりと云う人あらざれどて。るをるをてをにりたがらざるたしてありや。なにしてつきはもののにはあるなし。やがののきはに在りてにはのなりしにしはのなり。のとのとにはてをぐことをとうざらんものをることのととをひたることだかなりしにてはのなるてりくにせり。ののにりてはやにつしてのにざることをいず。にとをするをとせり。するにはのなり。にのみを以てするもなるありとず。はにもにずるのみ。のきにまれながらのをもず。をるをりと言う人あらば。の山のの如くあまりにをらしあまりにをくしぎたりとむるあらば。はてもし。のみはがねばならぬなり。

おきなさびばずかざるちかたののふくろ

らんかも

この辺りは遠野物語を柳田國男が書くにあたっての少しばかり小難しい風の面白可笑しい長い言い訳。笑って読めればいいと思われる(笑)

今昔物語は平安時代にまとめられた当時の印度、中国、日本の説話集。「今は昔…」と千話以上が記されている（らしい）。一説に宇治大納言源隆国が編纂に関与したとも云われていた。

「假令」→「仮令」。漢語の読み下しに由来する現代の「例え」にまとめられる表現。

「誠實」→「誠実」

「聽」→「聴」

御伽百物語は宝永３年(明治４３年から遡る事２０４年前、徳川吉宗がまだ紀州藩主の頃)に刊行されたらしい百物語を基にした怪談集。百物語は日本の伝統的な怪談の手法。

「辨」→「弁」

「所當」→「所当」

木兎は梟の仲間で耳の様な立派な睫毛の様な羽を持つ鳥。

「おきなさび」は「翁寂び」、「をちかたの」は「落ち方の」とすれば前半の解釈は繋がり、後半を文字通り捉えれば前の言い訳にも合致する。柳田國男が真に謙虚であったのかもしれないが、全く合致し過ぎて深読みしたくなる。

(のはのなりにはず)

の

の

カクラサマ

ゴンゲサマ

の

オクナイサマ

オシラサマ

ザシキワラシ

の神

山の

の

とと

一、五、六七、一一一

二、六九、七四

九八

七二-七四

一一〇

一六

一四、一五、七〇

六九

一七、一八

八九-九一、九三、一〇一、一〇七、一〇八

二七、五四

二九、六二

五、六、七、九、二八、三〇、三一、九二

三、四、三四、三五、七五

三二、三三、六一、九五

四九

一一二

六六、一一一、一一三、一一四

六五、七一

の

の人

のさま

の

の

まぼろし

の

の

の

雨風祭

六七、六八、七六

八、一〇、一一、一二、二一、二六、八四

八〇、八三

一三、一八、一九、二四、二五、三八、六三

六三、六四

二〇、五二、七八、九六

二二、八六-八八、九五、九七、九九、一〇〇

二三、七七、七九、八一、八二

一〇三

五五-五九

四五、四六

四七、四八

三六-四二

四三

六〇、九四、一〇一

五一-五三

三三、五〇

一四、一〇二-一〇五

一〇九

一一五-一一八

一一九

遠野物語

**一** は今の郡の西の半分、山々にて取まれたるなり。にては遠野、、、松崎、青笹、、、、、、のにつ。は閉伊郡ともし。には又ともべり。の在る遠野町はちのにして、のなり。をとも云ふ。へくにはのにてをり、をり、ののをひて、のへること。遠野の町にる。にはしきの地なり。へ。遠野郷のはすべてのなりしに。其水猿ヶ石川とりてにれでしより、にの如きをなせしなりと。さればのこの猿ヶ石にものだく、にありとす。は又はのことにて、のには多くあり。

**二** 遠野の町はの川のに在り。はとて、つののよりのをめ、其の日は、のしさなりき。のの中にもでたるをと云ふ。北の方の奥に在り。東の方には山立てり。と云ふ山は附馬牛ととのに在りて、そのさの二つよりもれり。にあり、のをて此にり、今の村ののあるにりし、よきを見たらん娘によき山をべしとののりてたりしに、くよりりてのののにりしを、の姫めてに之を取り、の上にせたりしかば、に最もしきの山を、姉たちは六角牛と石神とを得たり。き三人の女神の山にしも之をしたまに、遠野のどもはをれて今もにはばずと云り。

「圍」→「囲」

「稱」→「称」

**三** 山々の奥にはめり、村の佐々木と云ふ人は今もにてせり。かりしをして山奥に入りしに、かなるの上に美しきありて、きをりて居たり。のめてし。のなればにをしけてちせしに、にじてれたり。にけけてれば、のたけ高き女にて、きたる黒髪は又そのたけよりも長かりき。のにせばやとてをいさかり取り、之をねてに入れ、やがてにしに、道のにてへくをしければ、くにりてまどろみたり。ととののうなるに、もの高き男一人よりてにをし入れ、かの綰ねたる黒髪を取りしると見ればちはめたり。なるべしとり。

**四** のとの、と云ふ山にり、をりてとしぎてらんとする時、の上をのきるにきて見れば、奥の方なるの中より若き女のをたるが笹原の上をみてへ來るなり。極めてあでやかなる女にて、これも長き黒髪を垂れたり。兒をい付けたるはのにて、これもたるはののなれど、のあたりはぼろ〲にれたるを、色々ののなどをてりたり。は地にくともえず。事もげに此方に近より、男のすぐ前をりてかきぎたり。はのろしさよりひ始めて、しくみてありしが、近き頃せたり。

**五** 遠野郷よりの、などへ越ゆるには、昔よりと云ふあり。山口村より六角牛の方へ入りのりも近かりしかと此峠を越ゆる者、にてずにより。も怖ろしがりてにもになりしかば、終にの道をと云ふにき、をとして今は此方ばかりを越ゆるうになれり。のなり。

**六** 遠野郷にてはのことを今でもと云ふ。青笹村の長者の娘、ふと物に取りされてしくなりしに、じ村のと云ふ、山にりて一人の女にふ。怖ろしくなりて之をたんとせしに、ぢでは無いか。ぶつなと云ふ。きてよく見ればの長者がまな娘なり。にこんな處には居るぞとば、物に取られて今は其となれり。もあまたみたれど、すべてがひして一人のくり。おのれはにをることなるべし人にもな。もければくれと云ふまに、をも問ひらめずしてげれりと云ふ。

**七** 上郷村のの娘、をに山に入りたるまゝ歸り來らず。家の者はしたるならんと思ひ、女のしたるをとしてをひ、さてをぎたり。るにの獵をしてののあたりにりしに、なるのひかゝりてのうになれる所にて、らず女にいたり。にき、にしてかゝる山には居るかと問へば、女のく、山に入りてろしきにさられ、こんな所に來たるなり。げてらんとどかのも無しとのことなり。其人は如何なる人かと問ふに、にはの人間と見ゆれど、たゞめて高くのししと思はる。もかみたれど、にざればにはずと云ひてにやすにや、れへかりてしまふと云ふ。まことにとじかとしして問へば、衣類などものなれど、たゞ眼の色少しちがへり。に一度か二度、同じうなる集り來て、か話をし、やがてへか出て行くなり。などより持ち來るを見ればへも出ることならん。かく言うにも今にそこへて來るかも知れずと云ふ故、獵師も恐ろしくなりて歸りたりと云へり。二十年ばかりも以前のことかと思はる。

**八** に女や子共の家の外に出て居る者はよくしにあふことはのと同じ。松崎村のと云ふ所の民家にて、若き娘ののにをぎきたるまゝを知らずなり、三十年あまり過ぎたりしに、のに集りてありし處へ、極めていさらぼひて其女歸り來れり。如何にして歸つて來たかと問へば、人々に逢ひたかりし故歸りしなり。さらば又行かんとて、びをめずきせたり。は風のしくく日なりき。されば遠野郷の人は、今でも風のがしき日には、はサムトのが歸つて來さうな日なりと云ふ。

**九** と云ふは若き頃をとせり。のにて、しにをひて行く時などは、よく笛を吹きながら行きたり。あるに、あまたののとにへゆる境木峠を行くとて、又笛を取出して吹きすさみつゝ、と云ふ所の上を過ぎたり。大谷地は深き谷にての林しげく、其下は葦など生じりたるなり。のよりかがきにていぞーとはる者あり。くを走りたりと云へり。

**一〇** あるにり、をるとてをけりてありしに、にき處にてきーと云ふ女のこえをかしたることあり。へ歸りて見れば、じ、も同じに、自分のなる女そののにされてありき。

**一一** 女と云ふはのなりしに、ととのしくなり、嫁はへ行きて歸り來ざることあり。は嫁は家に在りてしてりしに、の頃になりとの言ふには、ガガはとてもしては置かれぬ、はきつと殺すべしとて、大なるを取り出し、ごし〲とぎ始めたり。そのにとも見えざれば、母は様々にけてびたれども少しもかず。嫁もでゝ泣きながらめたれど、色も無く、やがては母がれでんとするあるを見て、のをくしたり。にきたしと言へば、おのれらよりを持ち來りてへせよと云ふ。にもなりしかば母もにあきらめて、大なるのにうづくまりきて居たり。はよく〱ぎたるを手にしてよりり、づのをけてぐうにすれば、のののにかりてよくれず。其時に母はのにて彌之助が聞き付けしやうなる叫聲を立てたり。二度目には右の肩よりりげたるが、にてもえずしてある所へ、きてけ悴をへにをびてしたり。がまだをちてあるのことなり。母親は男がへられ引き立てられて行くを見て、のやうにのるゝ中より、おのれはもかずにぬるなれば、はしたまはれと言ふ。之を聞きて心をかさぬ者は無かりき。孫四朗はにてもをげてをしなどせしが、なりとてせられてにり、今もきてにり。

**一二** 土淵村山口にと云ふ老人あり。村の人はといふ。今はに近くみてにんとす。遠野郷の昔の話をよく知りて、かにしてかせきたしとのうに言へど、あまりければちりて聞かんとする人なし。ののの、の、昔より此にれしのを始めとして、の又はにめるのなど、もよくれり。

**一三** はののににてみしなり。よきなれど、きをけててより、世の中にをち、のにをけ、をの人にりてとす。のはをのやうに思ひてしみたり。少しく収入のあれば、町にり來て酒を飲む。にて作りたるをて、赤きをり酔へは町の中を踊りて歸るに巡査もとがめず。老衰して後、に歸りあはれなるしを爲せり。子供はすべて北海道へ行き、翁唯一人也。

**一四** には必ず一戸の舊家ありて、オクナイサマと云ふ神をる。其家をばと云ふ。此神の像はの木をりてをき、四角なるのに穴をけ、之をより

して衣裳とす。正月の十五日にはの人々この家に集り來りて之を祭る。又オシラサマと云ふ神あり。此神の像も亦同じやうにして造りけ、これも正月の十五日に集まりて之を祭る。其式にはを神像の顔に塗ることあり。大同の家には必ず一帖のあろ。此にてる者はいつも不思議にふ。をすなどは常のことなり。或は誰かにされ、又は室よりきさるゝこともあり。凡そ静かに眠ることを許さぬなり。

**一五** オクナイサマを祭れば多し。土淵村大字の長者阿部氏、村にてはのと云ふ。此家にて或年えのらず、はもしきに、ばかりの田を残すことかなどつぶやきてありしに、ふとよりとも無く丈低き一人來りて、おのれも手傳ひ申さんと言ふに任せてかせて置きしに、にを食はせんとて尋ねたれど見えず。やがて再び歸り來て終日、をきよく働きてれしかば、其日に植ゑはてたり。どこの人かは知らぬが、晩には來て物を食ひたまへとひしが、日暮れて又其見えず。家に坐敷に入り、オクナイサマのの所にりてありしかば、さてはと思ひて其を開き見れば、神像の腰より下は田のにまみれていませし由。

**一六** コンセサマを祭れる家も少なからず。此神の神體はオコマサマとよく似たり。オコマサマの社は里に多くあり。石又は木にて男の物を作りて捧ぐる也。今は追々とその事少なくなれり。

**一七** にはザシキワラシと云ふ神の住みたまふ家少なからず。此神は多くは十二三ばかりの童兒なり。折々人に姿を見することあり。土淵村大字の勘十郎と云ふ人の家にては、近き頃高等女學校に居る娘の休暇にて歸りてありしが、或日にてはたとザシキワラシに行き逢ひ大に驚きしことあり。これは正しく男の兒なりき。同じ村山口なる佐々木氏にては、母人ひとり縫物して居りしに、次の間にて紙のがさ〲と云ふ音あり。此室は家の主人のにて、其時は東京に行き不在の折なれば、恠しと思ひて坂戸を開き見るに何の影も無し。ワラシなりけりと思へり。此家にも坐敷ワラシ住めりと云ふこと、久しき以前よりの沙汰なりき。此神の宿りたまふ家は富貴自在なりと云ふことなり。

**一八** ザシキワラシ又女の兒なることあり。同じ山口なる舊家にて山口孫左衛門と云ふ家には、童女の神二人いませりと云ふことを久しく言傳へたりしが、或年同じ村の何某と云ふ男町より歸るとての橋のほとりにて見慣れざる二人のよき娘に逢へり。物思はしき様子にて此方へ來る。お前たちはどこから來たと問へば、おら山口の孫左衛門が處から來たと答ふ。此から何處へ行くのかと聞けば、それの村の何某が家にと答ふ。その何某は離れたる村にて今も立派に暮せる豪農なり。さては孫左衛門が世も末だなと思ひしが、それより久しからずして、此家の主従二十幾人、茸の毒にりて一日のうちに死に絶え、七歳の女の子一人を殘せしが、其女も亦年老いて子無く、近き頃病みて失せたり。

一九 孫左衛門が家にては、或日梨の木のめぐりに見慣れぬのあまたえたるを、食はんか食ふまじきかと男共の評議してあるを聞きて、最後の代の孫左衛門、食はぬがよしと制したれども、下男の一人が云ふには、如何なる茸にしても水桶の中に入れてを以てよくかきして後食へば決してることなしとて、一同此言に従ひ家内悉く之を食ひたり。七歳の兒は其日外に出でゝ遊びに氣を取られ、茸飯を食ひに歸ることを忘れし爲に助かりたり。不意の主人の死去にて人々のしてある間に、遠き近き親類の人々、或は生前に貸ありと云ひ、或は約束ありとして、家の貸財は味噌の類までも取去りしかば、此村の長者なりしかども、一朝にして跡方も無くなりたり。

**二〇** 此の前には色々の前兆ありき。男ども苅置きたるを出すとて三ツ齒の鍬にて掻きまはせしに、大なる蛇を見出したり。これも殺すなと主人が制せしをも聽かずして打殺したりしに、其跡より秣の下にいくらとも無き蛇ありて、うごめき出でたるを、男ども面白半分に悉く之を殺したり。さて取捨つべき所も無ければ、屋敷のに穴を掘りて之を埋め蛇塚を作る。その蛇はに何荷とも無くありたりといへり。

**二一** 右の孫左衛門は村には珍しき學者にて、常に京都より和漢の書を取寄せて讀みりたり。少し變人と云ふ方なりき。狐と親しくなりて家を富ます術を得んと思ひ立ち、先ず庭の中にのをて、自身京にりて正一位の神階をけて歸り、それよりは日々一枚のをかすことなく、手づから社頭にへてを爲せしに、後には狐馴れて近づけどもげず。延して其首を抑へなどしたりと云ふ。村に在りしのは、我が佛様は何物をも供へざれども、孫左衛門の神様よりは御利益ありと、度々笑ひごとにしたりと也。

**二二** 佐々木氏の曾祖母年よりて死去せし時、棺に納め親族の者集り來て其夜は一同座敷にて寝たり。死者の娘にての爲せられたる婦人も亦其中に在りき。喪の間は火のを絶やすことをむが所の風なれば、祖母と母との二人のみは、大なるのにり、母人はに炭籠を置き折々炭をぎてありしに、ふと裏口の方より足音して來る者あるを見れば、くなりし老女なり。平生腰かゞみてのの引ずるを三角に取上げて前に縫付けてありしが、まざ〲とその通りにて、にもえあり。あなやと思ふ間も無く、二人の女の座れる爐の脇を通り行くとて、裾にて炭取にさはりしに、丸き炭取なればくる〱とまはりたり。母人はの人なれば振り返りあと見送りたれば、親類の人々の打臥したる座敷の方へ近より行くと思ふ程に、かの狂女のけたゝましき聲にて、おばあさんが來たと叫びたり。の人々は此聲に睡を覺し只打驚くばかりなりしと云へり。

**二三** 同じ人ののに、の者集りて、夜更くるまで念佛を唱へ立歸らんとする時、の石に腰掛けてあちらを向ける老女あり。其うしろ付正しく亡くなりし人の通りなりき。此は數多の人見たる故に誰も疑はず。如何なるのありしにや、終に知る人はなかりし也。

**二四** 村々の舊家を大同と云ふは、大同元年に甲斐國より移り來たる家なればかく云ふとのことなり。大同は田村將軍征討の時代なり。甲斐は南部家の本國なり。二つの傳説を混じたるにいは非ざるか。

**二五** 大同の祖先たちが始めて此地方に到著せしは、も歳の暮にて、春のいそぎの門松を、まだ片方はえ立てぬうちに早元日になりたればとて、今も此家々にては吉例として門松の片方を地に伏せたるまゝにて、を引き渡すとのことなり。

**二六** 柏崎の田圃のうちと稱する阿部氏は殊に聞こえたる舊家なり。此家の先代に彫刻に巧なる人ありて、遠野一郷の神佛の像には此人の作りたる者多し。

二七 より出でゝ東方の方の海に流れ入る川を川と云ふ。其流域はち下閉伊郡なり。遠野の町の中にて今はのと云ふ家の先代の主人、宮古へ行きての歸るさ、此川ののと云ふあたりを通りしに、若き女ありて一封の手紙を託す。遠野の町の後なる物見山の中腹にある沼に行きて、手を叩けば宛名の人出で來るべしとなり。此人請け合ひはしたれども路々心に掛りてとつおいつせしに、一人の六部に行き逢へり。此手紙を開きよみて曰く、此を持ち行かば汝の身に大なる災あるべし。書き換へて取らすべしとて更に別の手紙を興へたり。これを持ちて沼に行き教の如く手を叩きしに、果して若き女出でゝ手紙を受け取り、其なりとて極めて小さきをたり。米を一粒入れてせば下より黄金出づ。此の力にてその家になりしに、妻なる者深くして、一度にの米をつかみ入れしかば、石臼はに自ら囘りて、終には朝毎に主人が此石臼に供へたりし水の、小さき窪みの中に溜りてありし中へ滑り入りて見えずなりたり。その水溜りは後に小さき池になりて、今も家のに在り。家の名を池の端と云ふも其爲なりと云ふ。

**二八** 始めて早地峯に山路をつけたるは、附馬牛村の何某と云ふ獵師にて、時は遠野の南部家の後のことなり。其頃までは土地の者一人として此山には入りたる者無かりし也。この獵師半分ばかり道を開きて、山の半腹に假小屋を作りて居りし頃、或日爐の上に餅を並べ焼きながら食ひ居りしに、小屋の外を通る者ありてに中をふさまなり。よく見れば大なる坊主也。やがて小屋の中に入り來り、さも珍しげに餅の焼くるを見てありしが、終にこらへ兼ねて手をさし延べて取りて食ふ。獵師も恐ろしければ自らも亦取りてへしに、嬉しげになほ食ひたり。餅皆になりたれば歸りぬ。次の日も又來るならんと思ひ、餅によく似たる白き石を二つ三つ、餅にまじへて爐の上に載せ置きしに、焼けて火のやうになれり。案の如くその坊主けふも來て、餅を取りて食ふこと昨日の如し。餅きて後其白石をも同じやうに口に入れたりしが、大に驚きて小屋を飛び出し姿見えずなれり。後に谷底にて此坊主の死してあるを見たりと云へり。

**二九** は早地峯の前面に立てるなり。の里にては又とも云ふ。天狗住めりとて、早地峯に登る者も決して此山は掛けず。山口のハチトと云ふ家の主人、佐々木氏の祖父との友なり。極めて無作法にて、にて草を苅り鎌にて土を掘るなど、若き時はののみ多かりし人なり。或時人とをして一人にて前薬師に登りたり。歸りての物語に曰く、頂上に大なる岩あり、其岩の上に大男三人たり。前にあまたの金銀をひろげたり。此男の近よるを見てばみて振り返る、その眼の光極めて恐ろし。早地峯に登りたるがに迷ひて來たるなりと言へば、然らば送りてるべしとてに立ち、麓近き處まで來り、眼をげと言ふまゝに、暫時そこに立ちて居る間にち異人は見えずなりたりと云ふ。

**三〇** 村の何某と云ふ男、或日早地峯に竹をりに行きしに、のしく茂りたる中に、大なる男一人寢て居たるを見たり。地竹にて編みたる三尺ばかりの草履をぎてあり。に臥して大なるをかきてありき。

**三一** 遠野郷の民家の子女にして、異人にさらはれて行く者年々多くあり。殊に女に多しとなり。

**三二** は山中にあり。此谷は物すごくきのする所にて、此山に入り歸りたる者はまことにし。昔何の隼人と云ふ獵師あり。其子孫今もあり。白き鹿を見て之を追ひ此谷に千晩こもりたれば山の名とす。其白鹿撃たれて遁げ、次の山まで行きて折れたり。其山を今と云ふ。さて又前なる山へ來て終に死にたり。其地をと云ふ。

**三三** の山に行きてれば、深夜にあたりのるくなることあり。秋の頃を探りに行き山中に宿する者、よく此事に逢ふ。又谷のあなたにて大木を伐り倒す音、歌の聲などゆることあり。此山の大さはるべからず。五月にを苅りに行くとき、遠く望めば桐の花の咲き満ちたる山あり。恰も紫の雲のたなびけるが如し。されども終に其あたりに近づくこと能はず。て茸を探りに入りし者あり。白望の山奥にて金のと金のとを見たり。持ち歸らんとするに極めて重く、鎌にて片端を削り取らんとしたれどそれもかなはず。又來んと思ひて樹の皮を白くしとしたりしが、次の日人々と共に行きて之を求めたれど、終に其木のありかをも見出し得ずしてやみたり。

**三四** 白望の山きにと云ふ所あり。そのに長者屋敷と云ふは、全く無人の境なり。に行きて炭を燒く者ありき。或夜その小屋のをかゝげて、内をふ者を見たり。髪を長く二つに分けて垂れたる女なり。此あたりにても深夜に女の叫聲を聞くことは珍しからず。

**三五** 佐々木氏の祖父の弟、白望に茸を採りに行きて宿りし夜、谷を隔てたるあなたの大なる森林の前を横ぎりて、女の走り行くを見たり。中空を走るやうに思はれたり。待てちやァと二聲ばかり呼はりたるを聞けりとぞ。

**三六** 猿の、の經立は恐ろしきものなり。御犬とは狼のことなり。山口の村に近き二ッ石山は岩山なり。ある雨の火、小學校より歸る子ども此山を見るに、處々の岩の上にうづくまりてあり。やがて首をよりぐるやうにしてかはる〲えたり。正面より見ればれての馬の子ほどに見ゆ。から見れば小さしと云へり。御犬のうなる聲ほど物凄く恐ろしきものは無し。

**三七** ととの間にて、昔は駄賃馬をふ者、狼に逢ひたりき。は夜行には大抵十人ばかりもを爲し、その一人が牽く馬はとて大抵五六七までなれば、常に四五十匹の馬の數なり。ある時二三百ばかりの狼追い來り、其足音山もどよむばかりなれば、あまりの恐ろしさに馬も人も一所に集まりて、其めぐりに火を燒きて之を防ぎたり。されど猶其火をり越えて入り來るにより、終には馬の綱を解き之をり囘らせしに、などなりとや思ひけん、それより後は中に飛び入らず。遠くよりみて夜の明るまで吠えてありきとぞ。

三八 村の舊家の主人にて今も生存せると云ふ人、町より歸りにに御犬の吠ゆるを聞きて、酒に酔ひたればおのれも亦其聲をまねたりしに、狼も吠えながら跡より來るやうなり。恐ろしくなりて急ぎ家に歸り入り、門の戸をくしてみたれども、夜通し狼の家をめぐりて吠ゆる聲やまず。けて見れば、馬屋のの下を掘りちて中に入り、馬の七頭ありしを悉く食ひ殺してたり。此家はその頃よりきたりとのことなり。

**三九** 佐々木君幼き頃、祖父と二人にて山より歸りしに、村に近き谷川の岸の上に、大なる鹿の倒れてあるを見たり。横腹は破れ、殺されても無きにや、そこよりはまだ立てり。祖父の曰く、これは狼が食ひたるなり。此皮ほしけれどもは必ずどこか此近所に隱れて見てるに相違なければ、取ることが出來ぬと云へり。

**四〇** 草の長さ三寸あれば狼は身を隱すと云へり。の色の移り行くにつれて、狼の毛の色も季節ごとにりて行くものなり。

**四一** 和野の佐々木喜兵衛、或年境木越の大谷地へ狩にゆきたり。の方より走れる原なり。秋の暮のことにて木の葉は散りし山もあらは也。の峯より何百とも知れぬ狼此方へ群れて走り來るを見て恐ろしさに堪へず、樹の梢にりてありしに、其樹の下をしき足音して走り過ぎ北の方へ行けり。その頃より遠野郷には狼甚だ少なくなれりとのことなり。

四二 山の麓にヲバヤ、板小屋など云ふ所あり。廣き山なり。村々より苅りに行く。ある年の秋の者ども萱を苅るとて、岩穴の中より狼の子三匹を見出し、その二つを殺し一つを持ち歸りしに、その日より狼のの馬をふことやまず。外の村々の人馬にはかも害を爲さず。飯豊衆相談して狼狩を爲す。其中には相撲を取りの者あり。さて野に出でゝ見るに、の狼は遠くにりて來らず。狼一つと云ふ男に飛び掛りたるをワツボロを脱ぎてに巻き、に其狼の口の中に突込みしに、狼之を嚙む。猶強く突き入れながら人をぶに、誰も々々怖れて近よらず。其間に鐵の腕は狼の腹までり、狼は苦しまぎれに鐵の腕骨を嚙み砕きたり。狼は其場にて死したれども、鐵もがれて歸り程なく死したり。

**四三** 一昨年の遠野新聞にも此記事を載せたり。上郷村の熊と云ふ男、友人と共に雪の日に六角牛に狩に行き谷深く入りしに、熊の足跡を見出でたれば、手分して其跡をめ、自分は峯の方を行きしに、とある岩の陰より大なる熊此方を見る。あまりに近かりしかば、銃をすてゝ熊に着き雪の上をびて谷へ下る。の男之を救はんと思へども力及ばず。やがて谷川に落入りて、人の熊のになり水に沈みたりしかば、そのに獸の熊を打取りぬ。水にもれず、爪の傷は數ヶ所受けたれども命にることはなかりき。

**四四** 六角牛の峯續きにて、と云ふ村の上なる山にあり。この鑛山の爲に炭を燒きて生計とする者、これも笛の上手にて、ある日のに居り、にびて笛を吹きてありしに、小屋の口なるをかゝぐる者あり。驚きて見れば猿のなり。恐ろしくて起き直りたれば、おもむろに彼方へ去り行きぬ。

**四五** 猿のはよく人に似て、女色を好み里の婦人を盗み去ること多し。を毛にり砂を其上に附けてる故、はの如く鐵砲の彈もらず。

**四六** 栃内村のに住む何某と云ふ男、今は五十に近し。十年あまり前のことなり。六角牛に鹿を撃ちに行き、オキを吹きたりしに、猿の經立あり、之をの鹿なりと思ひしか、を手にてけながら大なる口をあけ嶺の方よりり來れり。れて笛を吹止めたなれば、やがてれて谷の方へ走り行きたり。

**四七** 此地方にて子供をおどすに、六角牛の猿の經立が來るぞと云ふこと常の事なり。此山には猿多し。のを見に行けば、の樹のにあまたり、人を見ればげながら木のなどをちて行くなり。

**四八** 仙人峠にもあまた猿をりて行人にれ石を打ち付けなどす。

**四九** 仙人峠は登り十五里下り十五里あり。其中程に仙人の像を祀りたる堂あり。此堂のには旅人がこの山中にて遭ひたる不思議の出來事を書きすこと昔よりなり。例へば、我は越後の者なるが、何月何日の夜、この山路にて若き女の髪を垂れたるに逢へり。こちらを見てにこと笑ひたりと云ふ類なり。又此所にて猿にをせられたりとか、三人の盗賊に逢へりと云ふやうなる事を記せり。

**五〇** の山にカツコ花あり。遠野郷にても珍しと云ふ花なり。五月のく頃、女や子ども之を探りに山へ行く。の中にけて置けばになる。ののやうに吹きて遊ぶなり。此花を探ることは若き者の最も大なるなり。

**五一** 山にはの鳥めど、最もしき聲の鳥はオット鳥なり。夏のに啼く。濱のよりの者など峠を越え來れば、遙に谷底にて其聲を聞くと云へり。昔ある長者の娘あり。又ある長者の男の子としみ、山に行きて遊びしに、男見えずなりたり。夕暮になり夜になるまでしあるきしが、之を見つくることを得ずして、終に此鳥になりたりと云ふ。オットーン、オットーンと云ふは夫のことなり。末の方かすれてあはれなる鳴聲なり。

**五二** 馬追鳥はに似てし大きく、の色は赤に茶を帯び、肩には馬ののやうなるあり。胸のあたりにクツゴゴのやうなるかたあり。これも或長者が家の奉公人、山へ馬をしに行き、家に歸らんとするに一匹不足せり。夜通し之を求めあるきしが遂に此鳥となる。アーホー、アーホーと啼くは此地方にて野にる馬を追ふ聲なり。年により馬追鳥里に來て啼くことあるは飢餓の前兆なり。深山には常に住みて啼く聲を聞くなり。

**五三** ととは昔有りしなり。郭公は姉なるがある時を掘りて燒き、そのまはりの堅き所を自ら食ひ、中のかなる所を妹に與へたりしを、妹は姉の食ふは一層かるべしと想ひて、包丁にて其姉を殺せしに、忽ちに鳥となり、ガンコ、ガンコと啼きて飛び去りぬ。ガンコは方言にて堅い所と云ふことなり。妹さてはよき所をのみおのれに呉れしなりけりと思ひ、悔恨に堪へず、やがて又これも鳥になりて包丁かけたと啼きたりと云ふ。遠野にては時鳥のことを包丁かけと呼ぶ。にては、時鳥はどちらやへ飛んでたと啼くと云ふ。

**五四** のには多く恐ろしき傳説少なからず。小國川との落合に近き所に、川井と云ふ村あり。其村の長者の奉公人、ある淵の上なる山にて樹を伐るとて、斧を水中にしたり。主人の物なれば淵に入りて之をしに、水の底に入るまゝに物音聞ゆ。之を求めて行くに岩の陰に家あり。奥の方に美しき娘を織りてたり。そのハタシに彼の斧は立てかけてありたり。之を返したまはらんと言う時、振り返りたる女の顔を見れば、二三年前に身まかりたる我が主人の娘なり。斧は返すべければ我がにあることを人に言ふな。其としては其方くなり、奉公をせずともすむやうにして遣らんと言ひたり。その爲なるか否かは知らず、其後など云ふに不思議に勝ちけてり、程なく奉公をやめ家に引込みての農民になりたれど、此男はくに物忘れして、此娘の言ひしことも心付かずしてありしに、或日同じ淵のをぎて、町へ行くとて、ふと前の事を思ひ出し、へる者に以前かゝることありきと語りしかば、やがて其噂は近郷に傳はりぬ。其頃より男は家産再びき、又昔の主人に奉公して年を經たり。家の主人は何と思ひしにや、その淵にとも無く熱湯をぎ入れなどしたりしが、何のも無かりしとのことなり。

五五 川には多く住めり。猿ヶ石川殊に多し。松崎村ののにて、二代まで續けて河童の子をみたる者あり。生まれし子はりみてに入れ、土中にめたり。其極めてなるなるものなりき。女のの里は村の何某とて、これも川端の家なり。。其主人に其を語れり。かの家の者一同ある日に行きて夕方に歸らんとするに、女川のにりてにこ〱と笑ひてあり。次の日はの休に亦此事あり。斯くすること日を重ねたりしに、次第に其女の所へ村の何某と云ふ者ふと云ふ立ちたり。始には聟が濱の方へに行きたる留守をのみ窺ひたりしが、後には聟とたるさへ來るやうになれり。河童なるべしと云ふ評判段々高くなりたれば、一族の者集りて之を守れども何の甲斐も無く、聟の母も行きて娘のにたりしに、深夜にその娘の笑ふ聲を聞きて、さては來てありと知りながら身動きもかなはず、人々如何にともすべきやうなかりき。其産は極めて難産なりしが、或者の言ふには、に水をたゝへ其中にて産まば安く産まるべしとのことにて、之を試みたれば果して其通りなりき。その子は手にあり。此娘の母も亦て河童の子を産みしことありと云ふ。二代や三代の因縁には非ずと言ふ者もあり。此家も如法の豪家にて○○○○○と云ふ士族なり。をしたることもあり。

**五六** 上郷村の何某の家にても河童らしき物の子を産みたることあり。確なるとては無けれど身内にして口大きく、まことにいやな子なりき。はしければ棄てんとて之を携へて道ちがへに持ち行き、そこに置きて一間ばかりも離れたりしが、ふと思ひ直し、惜しきものなり、賣りて見せ物にせば金になるべきにとて立歸りたるに、早取り隱されて見えざりきと云ふ。

**五七** 川の岸のの上には河童のと云ふものを見ること決して珍しからず。雨の日の翌日などは殊に此事あり。猿の足と同じくは離れて人間の手の跡に似たり。長さは三寸に足らず。指先のあとは人のゝやうに明かには見えずと云ふ。

**五八** ののにのと云ふあり。ある日へ馬をしに行き、の子はへ遊びに行きし間に河童出でゝ其馬を引込まんとっし、りて馬に引きずられての前に來り、にはれてありき。家の者馬槽の伏せてあるをしみて少しあけて見れば河童の手出でたり。村中の者集りて殺さんか宥さんかと評議せしが、結局は村中の馬にをせぬと云ふ堅き約束をさせて之を放したり。其河童今は村を去りての瀧の淵に住めりと云ふ。

**五九** の國にては河童の顔は青しと云ふやうなれど、遠野の河童は面の色きなり。佐々木氏の曾祖母、かりし頃友だちと庭にて遊びてありしに、三本ばかりあるの木の間より、なる顔したる男の子の顔見えたり。これは河童なりしとなり。今もその胡桃大木にて在り。此家の屋敷のめぐりはすべて胡桃の樹なり。

**六〇** 和野村の喜兵衛。に入りて雉子を待ちしに出でゝ雉子を追ふ。あまりければ之を撃たんと思ひひたるに、狐は此方を向きて何ともげなる顔してあり。さてを引きたけれども火らず。ぎして銃をせしに、より手元の處までいつの間にかく土をつめてありたり。

**六一** 同じ人六角牛に入りて白き鹿に逢へり。は神なりと云ふえあれば、しけて殺すこと能はずば、必ずあるべしとせしが、のなればのりをいとひ、思ひ切りて之を撃つに、へはあれども鹿少しも動かず此時もいたくぎして、けとしての時の爲に用意したるのを取出し、これにを巻き附けて打ち放したれど、鹿は猶動かず。あまり恠しければ近よりて見るに、よく鹿の形に似たる白き石なりき。數十年の間山中にせる者が、石と鹿とを見誤るべくも非ず、全くのなりけりと、此時ばかりは獵をめばやと思ひたりきと云ふ。

**六二** 又同じ人、あるにて小屋を作るいとま無くて、とある大木の下に寄り、けのサンヅをおのれと木とのめぐりに引きめぐらし、鐵砲をにへてまどろみたりしに、夜深く物音のするに心付けば、大なるの者赤きをのやうにばたきして、其木の梢にひかゝりたり。すはやと銃を打ち放せばやがて又羽ばたきしてを飛びかへりたり。此時の恐ろしさも世の常ならず。前後三たびまでかゝる不思議に遭ひ、其に鐵砲をめんと心に誓ひ、にけなどすれど、やがて再び思ひ返して、年取るまでのを棄つること能はずとよく人に語りたり。

**六三** 小國の三浦某と云ふは無一の金持なり。今より二三代前の主人、まだ家は貧しくして、妻は少しくなりき。この妻のある日のを流るゝ小さき川に沿ひてをりに入りしに、よき物少なければ次第に谷奥深く登りたり。さてふと見れば立派なる黒きの家あり。しけれど門の中に入りて見るに、大なる庭にて紅白の花一面に咲き多く遊べり。其庭をの方へれば、牛小屋ありて牛多く居り、ありて馬多く居れども、一向に人は居らず。終によりりたるに、その次の間にはと黒とのをあまた取出したり。奥の坐敷にはありての湯のたぎれるを見たり。されども終に人影は無ければ、もしは山男の家では無いかと急に恐ろしくなり、けして家に歸りたり。此事を人に語れどもと思ふ者も無かりしが、又或日家のカドに出でゝ物を洗ひてありしに、川上より赤き椀一つ流れて來たり。あまり美しければ拾ひ上げたれど、之を食器に用ゐたらばしと人にられんかと思ひ、ケセギツの中に置きてケセ子を量ると爲したり。然るに此器にて量り始めてより、いつ迄ちてもケセ子きず。家の者も之を恠しみて女に問ひたるとき、始めて川より拾い上げしをば語りぬ。此家はこれより幸運に向ひ、終に今の三浦家と成れり。遠野にては山中の不思議なる家をマヨヒガと云ふ。マヨヒガに行きりたる者は、必ず其家の内のにてもあれ持ち出でゝ來べきものなり。其人にけんが爲にかゝる家をば見する也。女が無慾にて何物をも盗み來ざりしが故に、この椀自ら流れて來たりしなるべしと云ふ。

**六四** はの、上閉伊郡の内にても殊に山奥にて、人の往來する者少なし。六七年前此村より栃内村の山崎なるかゝが家に娘のを取りたり。此聟に行かんとして山路に迷ひ、又このマヨヒガに行きりぬ。家の、牛馬鷄の多きこと、花の紅白に咲きたりしことなど、すべて前の話の通りなり。同じくに入りしに、膳椀を取出したる室あり。座敷に鐵瓶の湯たぎりて、今まさに茶を煮んとする所のやうに見え、どこか便所などのあたりに人が立ちて在るやうにも思はれたり。として後には段々恐ろしくなり、引返して終にの村里に出でたり。小國にては此話を聞きてとする者も無かりしが、山崎の方にてはそはマヨヒガなるべし、行きて膳椀の類を持ち來り長者にならんとて聟殿を先に立てゝ人あまた之を求めに山の奥に入り、こゝに門ありきと云ふ處に來たれども、眼にかゝるものも無くしく歸り來りぬ。その聟も終に金持になりたりと云ふことを聞かず。

**六五** はの山なり。此山の小國にきたるにと云ふ岩あり。しきの中程にありて、人などはとても行き得べき處に非ず。こゝには今でもの母住めりとふ。のるべき夕方など、のをす音聞ゆと云ふ。小國、の人々は、阿部ヶ城の錠の音がする、明日は雨ならんなど云ふ。

**六六** 同じ山の附馬牛よりの登り口にも亦と云ふ巌窟あり。兎に角早地峯は阿部貞任にゆかりある山なり。小國より登る山口にも八幡太郎ののしたるを埋めたりと云ふ塚三つばかりあり。

**六七** 阿部貞任に關する傳説は此外にも多し。土淵村と昔は橋野と云ひし栗橋村との境にて、山口よりは二三里も登りたる山中に、廣くなる原あり。其あたりの地名に貞任と云ふ所あり。沼ありて貞任が馬をせし所なりと云ふ。貞任がを構へしとも言いふ。よき所にて東海岸よく見ゆ。

**六八** 土淵村には阿部氏と云ふ家ありて貞任がなりと云ふ。昔はえたる家なり。今も屋敷の周囲には堀ありて水を通ず。刀劍馬具あまたあり。は阿部奥右衛門、今も村にては二三等の物持にて、なり。阿部の子孫は此外にも多し。盛岡のの附近にもあり。のに近き家なり。土淵村の阿部家の四五町北、のにの址あり。のと云ふ。八幡太郎が陣屋と云ふものなり。これより遠野の町への路には又八幡山と云ふ山ありて、其山の八幡澤の館の方に向へる峯にも亦一つのあり。貞任が陣屋なりと云ふ。二つの館の間二十餘町を隔つ。をしたりと云ふへありて、矢の根を多く堀り出せしことあり。此間にと云ふ部落あり。戰の此あたりは蘆しげりて土固まらず、ユキ〱と動揺せり。或時八幡太郎こゝを通りしに、何れのにや、粥を多く置きてあるを見て、これは煮た粥かと云ひしより村の名となる。似田貝の村の外を流るゝ小川をと云ふ。之を隔てゝあり。鳴川にてが足を洗ひしより村の名となると云ふ。

**六九** 今の土淵村には大同と云ふ家二軒あり。山口の大同は當主をと云ふ。此人の養母名はおひで、八十を超えて今も達者なり、佐々木氏の祖母の姉なり。魔法に長じたり。まじなひにて蛇を殺し、木にれる鳥を落としなどするを佐々木君はよく見せてもらひたり。昨年の正月十五日に、此老女の語りしには、昔ある處に貧しき百姓あり。妻は無くて美しき娘あり。又一匹の馬を養ふ。娘此馬を愛してになればに行きてね、終に馬とに成れり。或夜父は此事を知りて、其次の日に娘には知らせず、馬をれ出して桑の木につり下げて殺したり。その夜娘は馬の居らぬより父に尋ねて此事を知り、驚き悲しみて桑の木の下に行き、死したる馬の首にりて泣きゐたりしを、父は之をみて斧を以てより馬の首を切り落せしに、ち娘は其首に乗りたるまゝ天に昇り去れり。オシラサマと云ふは此時より成りたる神なり。馬をつり下げたる桑の枝にて其神の像を作る。其像三つありき。にて作りしは山口の大同にあり。之を姉神とす。中にて作りしは山崎の十朗と云ふ人の家に在り。佐々木氏の伯母が緣付きたる家なるが、今は家絶えて神の行方を知らず。末にて作りし妹神の像は今附馬牛村に在りと云へり。

**七〇** 同じ人の話に、オクナイサマはオシラサマの在る家には必ず伴ひてす神なり。されどオシラサマはなくてオクナイサマのみ在る家もあり。又家によりて神の像も同じからず。山口の大同に在るオクナイサマは木像なり。山口のたにえと云ふ人の家なるはなり。のうちにいませるは亦木像なり。の大同にもオシラサマは無けれどオクナイサマのみはいませりと云ふ。

**七一** 此話をしたる老女は熱心なる念佛者なれど、世の常の念佛者とは様かはり、一種邪宗らしき信仰あり。信者に道を傳ふることはあれども、互になる秘密を守り、其作法に就きては親にも子にもかたりとも知らしめず。又寺とも僧とも少しも関係はなくて、在家の者のみのりなり。其人の數も多からず。辷石たにえと云ふ婦人などは同じ仲間なり。阿彌陀仏のには、夜中人の静まるを待ちて會合し、隱れたる室にて祈祷す。魔法まじなひを善くする故に、にして一種のあり。

**七二** 栃内村の字はの澤に在り。